

社会福祉士国家試験対策とその支援の実績と課題

ー 2021 年度受験者へのインタビューを通してー

浜 内 彩 乃
西 川 ゆかり

キーワード：国家試験対策、社会福祉士、勉強への姿勢

昨年度より、オンライン資源と対面資源を組み合わせた新たな国家試験対策とその支援に取り組み、合格率を向上させてきた。本論では、2021 年度に行った国家試験対策とその支援が学生の国家試験に対する姿勢の変化や受験勉強にどのように影響したのかをインタビュー調査した結果、学生が有効だと感じたものは、【自分で行ったもの】と【大学が提供したもの】に大別され、【大学が提供したもの】のうち、特に有効と感じていたのは＜自主勉強会＞、＜社会福祉学特講＞、＜外部講座＞であった。また学生の気持ちには、＜とりあえず始める段階＞、＜停滞する段階＞、＜本格的に始める段階＞、＜最後の追い込み段階＞の4つの段階があることが分かった。今後、それぞれの段階に応じて、オンライン資源と対面資源を組み合わせ、さらに効果的な国家試験対策プログラムを構築していくことが急務とされる。

I. はじめに

社会福祉士の国家試験は、1989（平成元）年に第1回目が行われ、以後、年に1回実施されている。通常、大学で受験資格を獲得する学生は、卒業年次である4年生の2月上旬に受験資格取得見込みで受験する（以下、福祉系大学等ルート受験とする）。試験は、共通科目（午前）と専門科目（午後）に分かれ、共通科目11科目、専門科目8科目の計19科目であり、合計150問を解く必要がある。合格するためには、問題の総得点の60%を基準として問題の難易度で修正された点数以上の得点を取り、かつ全試験科目において得点を取る必要がある。

京都光華女子大学（以下、本学）が初めて受験生を出したのが2007年に実施された第19回の社会福祉士

国家試験である。それから現在の社会福祉専攻が創設されるまで、合格率は30%を超えることがなかったが、受験対策支援がより強化された2018年（第30回）から合格率は30%を超えて推移するようになった。社会福祉士の全国合格率平均は25%～30%程度であるが、福祉系大学等ルート受験の新卒合格率は40%～50%程度であり、全国合格率平均は上回るものの、新卒合格率平均には手が届かない状況が続いている。

京都光華女子大学社会福祉専攻（以下、本専攻）では、合格率を向上させるために教員らが国家試験対策とその支援についてさまざまな工夫をおこなってきた。例えば4年生の国家試験対策の授業として社会福祉学特講（前期、後期、夏季集中、通年集中）を開講していることがあげられる。また本専攻ではそれに加え、自主勉強会、複数回の模擬試験の実施、外部講座の受講などを実施してきた。しかし2020年度から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染が拡大し、対面授業や学内設備使用の制限が行われ、受験学年（4年生）を対象とした従来の対面を中心とした国家試験対策とその支援の実施が困難となった。そのためオンライン資源（YouTubeやZOOM、光華navi）を活用しつつ、既存の国家試験対策やその支援とを組み合わせ、新たな国家試験対策とその支援方法を模索した。

その結果、第33回の国家試験では合格率は38.5%（全国平均29.3%、新卒平均50.7%）となり、例年通りの合格率を出すことができた。この新たな国家試験対策とその支援方法が、受験生たちにどのような影響を与えたのか、著者らは合格発表後に受験生たちにインタビュー調査を行った（浜内・西川、2021）。その結果、学習方法に関して4年生になってから受験までの間に【強制力のあるものに頼る段階】【自主学習を短時間開始する段階】【本格的に試験勉強を行う段階】の3段階があり、次の段階に進むための【切り替えスイッチ】

があった。またオンライン資源でも対面資源でも【個別対応】【質問のしやすさ】【みんなの様子が見れる（リアルタイム ZOOM）】が良かった点としてあげられ、オンライン資源のみ【自分のペースで学べる】があげられた。

2021 年度は、この調査結果をふまえ、各段階を意識した授業構成や学生への声かけを行った。また 2020 年度よりも対面授業が多く実施できるようになったことから、受験生同士が授業の前後で話す機会があったり、授業の中で学生が質問をしやすいう工夫したりするなど、対面資源の良さを活かすことができた。同時に、オンライン資源の「自分のペースで学べる」という良さも残すために、全ての授業を録画し、授業後から受験当日まで視聴できるようにした。

そして、第 34 回国家試験で合格率は 46.2%（全国平均 31.1%、新卒平均 52.4%）となり、新卒合格率平均には手が届かなかったものの本学の歴代最高値となった（表 1）。本論では、2021 年度に行った国家試験対策とその支援が学生の国家試験に対する姿勢の変化や受験勉強にどのように影響したのかをインタビュー調査し、筆者らが行った昨年度の調査と比較しながら国家試験対策とその支援においてより有効な手

立てを検討することを目的とする。

Ⅱ. 本学での 2021 年度国家試験対策の取り組み

本専攻で 2021 年度に行った国家試験対策とその支援について、2020 年度と比較しながら説明する。なお、本論で用いる「オンライン資源」とは、インターネットにつながっている状態で用いる国家試験対策とその支援を指す。「オンライン資源」は、主に YouTube や ZOOM、光華 navi とする。また「対面資源」は、学生と直接顔を合わせて実施する国家試験対策とその支援を指し、対面での授業や面談等とする。

1. 社会福祉学特講について

「社会福祉学特講」にはⅠ～Ⅳの 4 種類があり、それぞれ時期や内容、形態は異なるが、すべて 15 コマの授業を実施しており、本専攻における国家試験対策の要となっている。2020 年度から 1 名の専任教員がメインで授業を担当し（以下、国試担当教員）、オンライン資源と対面資源を使用して開講した。またリアルタイム ZOOM で実施した授業のみ録画し、再視聴できるようにしていたが、2021 年度は更に全ての授

表 1. 社会福祉士国家試験合格率の推移

年度	国家試験回数	全国合格率	福祉系大学 新卒合格率	本学受験生	本学 合格者数	本学合格率
2006 年度	第 19 回	27. 4%	33. 3%	65	3	4. 6%
2007 年度	第 20 回	30. 6%	35. 7%	57	9	15. 8%
2008 年度	第 21 回	29. 1%	39. 9%	58	13	22. 4%
2009 年度	第 22 回	27. 5%	35. 0%	38	8	21. 1%
2010 年度	第 23 回	28. 1%	38. 9%	27	8	29. 6%
2011 年度	第 24 回	26. 3%	38. 5%	20	4	20. 0%
2012 年度	第 25 回	18. 8%	31. 4%	23	1	4. 3%
2013 年度	第 26 回	27. 5%	41. 7%	13	3	23. 1%
2014 年度	第 27 回	27. 0%	45. 4%	18	3	16. 7%
2015 年度	第 28 回	26. 2%	58. 4%	6	0	0. 0%
2016 年度	第 29 回	25. 8%	46. 3%	9	1	11. 1%
↓ 医療福祉学科社会福祉専攻での受験資格取得者 ↓						
2017 年度	第 30 回	30. 2%	54. 6%	18	8	44. 4%
2018 年度	第 31 回	28. 9%	53. 7%	14	5	35. 7%
2019 年度	第 32 回	29. 3%	56. 0%	17	6	35. 3%
2020 年度	第 33 回	29. 3%	50. 7%	13	5	38. 5%
2021 年度	第 34 回	31. 1%	52. 4%	13	6	46. 2%

業を ZOOM にて録画し、何度でも視聴できるようにした。そして、2020 年度は、模擬試験と過去問の解説に加え、一問一答や模擬問題など多くの問題を解くことを行っていたが、2021 年度は、5 回の模擬試験と過去 3 年分の過去問題の実施と解説に絞って行った。以下、「社会福祉学特講」Ⅰ～Ⅳの概要を説明する。

(1) 社会福祉学特講Ⅰ（4 年次前期）

「社会福祉学特講Ⅰ」（以下、「特講Ⅰ」）は 4 年次の前期授業期間に週 1 回 1 コマ、合計 15 コマの授業を実施している。2020 年度は、国試担当教員 1 名が担当した。2020 年度は光華 navi の小テスト機能を用いて社会福祉士国家試験の過去問題を実施していたが、2021 年度は、全て対面授業で実施した。また内容も次のように変更した最初の 2 コマは過去問題を実施し、残りの 13 コマは 1 年分の過去問題を丁寧に解説した。そして教科書として使用していた『社会福祉士国家試験のためのレビューブック 2022』（メディックメディア；第 10 版、2021）の使い方を徹底した。

(2) 社会福祉学特講Ⅱ（4 年次前期集中）

社会福祉学特講Ⅱ（以下、「特講Ⅱ」）は、4 年次の夏季休暇期間に集中講義として実施している。2020 年度においては 1 日 2 コマ～3 コマとし、6 日間に分け、合計 15 コマを全て対面授業にて実施した。2021 年度においても 1 日 2 コマ～3 コマとし、6 日間に分けて実施したが、長丁場となるため新型コロナウイルス感染症の感染予防のため合計 15 コマの授業をすべてリアルタイム ZOOM での実施に変更した。2020 年度は受験科目全ての一問一答を実施し、また教員も 4 名の専任教員がオムニバス形式で実施していたが、2021 年度は国試担当教員 1 名が全ての授業を担当し、内容も模擬試験と過去問題の解説に変更した。

(3) 社会福祉学特講Ⅲ（4 年次後期）

社会福祉学特講Ⅲ（以下、「特講Ⅲ」）は、4 年次の後期授業期間に週 1 回 1 コマ、合計 15 コマの授業で実施している。2020 年度は、2 クラスに分け、2 名の専任教員が対面授業やリアルタイム ZOOM で行ったが、2021 年度は国試担当教員 1 名がメインで授業を行い、もう 1 名の専任教員がサポートとして参加し、1 クラスのみでリアルタイム ZOOM にて実施した。

内容は、模擬試験の解説、過去問題の実施、過去問題の解説に加えて、2020 年度同様、1 コマは社会福祉士を現役合格した卒業生に来てもらい、1 年間どのような勉強していたのか、方法やモチベーションなどについての経験談を聞く時間を設けた。

(4) 社会福祉学特講Ⅳ（4 年次通年集中）

社会福祉学特講Ⅳ（以下、「特講Ⅳ」）は 4 年次の後期授業期間に集中講義として実施している。2020 年度は国試担当教員が 1 名で対面授業で行い、2021 年度も同様に実施予定であったが、2022 年 12 月末から 1 月にかけて COVID-19 の感染が拡大したことから、急遽、対面授業とリアルタイム ZOOM のハイブリッド形式に変更し、学生が授業形態を選択できるようにした。13 名の受講生のうち、毎回 4～6 名の学生が対面授業で参加した。内容は、模擬試験の解説、過去問題の実施、過去問題の解説を行った。

2. 光華 navi

本学では、学生の学びをサポートする光華 navi というオンライン資源を活用している。光華 navi は、授業の履修登録や時間割の確認、シラバス閲覧の他に、授業の出欠確認、アンケート機能や小テスト機能、課題の提出、学生から担当教員への連絡などができる。本学では 2007 年 12 月から光華 navi を導入しているが、2020 年度より COVID-19 の影響で光華 navi の活用が活発化した。光華 navi には授業の連絡を教員が書き込んだり、出席管理ができたりとさまざまな機能を用いることができるが、2021 年度の国家試験対策においては、学生コメントと授業資料の 2 つの機能を主として用いた。

(1) 学生コメント

光華 navi の中に課題提出のための機能があり、教員が課題を配信し、学生が課題を学生コメントに書き込んで提出することができる。そして学生が提出した課題に対して教員がコメントすることができる。社会福祉学特講Ⅰ～Ⅳでは毎回この機能を用いて学生に課題を与え、提出させることも授業の一環としていた。学生自身の振り返りができるよう、学習方法や自身の状況、困りごとなどを記載して提出させるという課題内容である。そして必ず一週間以内に国試担当教員が

コメントを返した。

(2) 授業資料

光華 navi の中に教員が授業についての連絡事項などを書き込める機能がある。社会福祉学特講Ⅰ～Ⅳでは毎回の授業を録画し、授業後に国試担当教員がYouTubeにアップし、限定公開設定をしたURLを授業資料に書き込み、国試当日まで自由に視聴できるようにした。また、国試に重要な資料の提示なども、都度行った。

3. 外部講座

本専攻では、2つの外部業者の国家試験対策講座を受講できるように支援している。これらは受講必須ではなく、大学の補助金を受けながら、自主的に申し込みを行った学生が自費で受講することができる。以下の2つの講座を合わせて、本稿では「外部講座」とする。

(1) 株式会社東京リーガルマインドの外部講座(以下、「LEC」)(4年次5月～7月)

通常LECでは、5月から7月に19コマの講義と、年間3回の模擬試験を実施している。毎年対面で実施していたが、COVID-19の影響により2020年度からオンラインでの録画配信による実施となった。2021年度は、リアルタイムのオンライン授業を行い、その録画配信が見られる形となった。模擬試験については、3回ともは本学にて対面で実施した(7月、11月、12月)。2021年度は、社会福祉士国家試験受験者13名全員が受講した。

(2) 社会福祉士受験対策セミナー(以下、「対策セミナー」)(4年次10月～12月)

毎年、京都府社会福祉協議会が、社会福祉士受験対策セミナーを開催している。このセミナーは、10月～12月の間に3日間行われている。本専攻では毎年この対策セミナーの受講を学生に勧めており、2021年度は11名が受講し、対面で開催された。

4. その他の取り組み

本専攻では、授業や外部講座だけでなく、模擬試験や自主勉強会も開催している。また、7月と11月に

受験学生13名全員にZOOMにて1人30分程度の面談を行い、学習状況の確認や学習方法の修正を行った。さらに、メールや研究室訪問にて、いつでも質問や相談を受けられるということを随時提示した。

(1) 模擬試験(4年次、7月、9月、10月、11月、12月)

模擬試験については、上記で述べたLECの模擬試験3回の他に、外部模試を2回実施した。2020年度はLECの模擬試験3回と中央法規出版の社会福祉士模擬試験の4回であったが、2021年度はそれに加えて、一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟が主催している、社会福祉士・精神保健福祉士全国統一模試を実施した。全ての模擬試験を社会福祉士国家試験受験者13名全員が本学にて対面で受験した。結果は社会福祉専攻教職員と受験者13名に共有した。

(2) 自主勉強会(4年次、後期)

授業外の時間に、自主勉強会を実施した。2020年度は、前期に「特講Ⅰ」の小テストで実施していた過去問題の解説をリアルタイムZOOMにて国試担当教員が行っていたが、2021年度は、基礎的な問題を中心とした一問一答を実習助手を中心として行った。具体的には、授業の最初に数問の一問一答を解き、一人一問ずつ答えと解説を述べる形を取った。答えられない問題は他の学生に協力を求め、皆が分からなければ実習助手ではなく学生主導で調べた。自主勉強会は希望者のみ参加できるようにし、対面とリアルタイムZOOMのどちらでも参加できるようにした。また1月には2回過去問題を実施した。

Ⅲ. インタビュー調査

1. 研究対象者

研究対象者は、第34回社会福祉士国家試験を受験し、2022年3月に本専攻を卒業した者13名(以下、卒業生)とする。

2. 研究方法

研究協力の同意が得られた卒業生のうち、合格者5名、不合格者1名にインタビュー調査を実施した。インタビュー調査は2022年5月、6月にZOOMを使って実施した。質問項目は「受験勉強を行う上で有効だった

た勉強方法について」、「大学での受験対策支援の中で役に立ったものは何か」、「オンライン授業と対面授業の違いについて」、「社会福祉士国家試験受験勉強中の気持ちの変化」などである。インタビュー内容は同意を得た上で録画をした。インタビュー時間は30分～70分程度、半構造化面接にて実施した。

3. 分析方法

不合格の卒業生からインタビュー調査について同意を得られたのが1名であったことから、匿名性の担保などの観点から今回の分析からは除外し、5名の合格した卒業生へのインタビュー内容の逐語録を作成した。そして、研究者2名によってデータを、内容ごとに区切って切片化し、共通点があるものをカテゴライズし、ラベル名をつけた。そしてさらに共通点があるものをカテゴライズし、新たにカテゴリー名をつける作業を繰り返し、新たなカテゴリーが抽出できなくなった時点で終了し、表に整理をした。

4. 倫理的配慮

本研究の倫理的配慮は、京都光華女子大学研究倫理委員による倫理審査の承認を得た（承認番号：136）。卒業生に対して、研究の趣旨や調査方法、参加の自由意思と不参加による不利益が生じることは一切ないこと、個人が特定されないことなどについて説明した。なお、利益相反に関する開示事項はない。

Ⅳ. 結果

合格者の逐語録をカテゴライズ及び、ラベリングを行った結果、27の小カテゴリー、10の中カテゴリー、3の大カテゴリーが作成された。大カテゴリーへのラベリングを《 》に記し、中カテゴリーへのラベリングを【 】に示し、小カテゴリーへのラベリングを＜ ＞に記した。

3の大カテゴリーは《国家試験において有効だったこと》、《有効だったと明言されなかったこと》、《勉強への姿勢》であり、以下にそれぞれの詳細について記す。

1. 国家試験において有効だったこと（表2）

「（有効だったことは）やっぱり過去問を解いたことですかね」と過去問について語られたことをまとめて＜過去問＞とラベリングし、「試験を受けているときも、頭の中で（中略）壁の右の紙に貼ってたな、とか」「書いていろんなとこに貼ることで覚える」と目につく場所に書いたものを貼ることで記憶を定着させることが有効とする語りが見られたことをまとめて＜書いて貼る＞とラベリングし、「一緒に勉強ってなるとやらな！ってなるし」「モチベーション保ち合ったり」と友人と一緒に受験勉強をすることで、やる気を向上させている語りをまとめて＜友達と勉強＞とラベリングした。そして、これら3つをまとめて【自分で行ったもの】とカテゴライズしてラベリングした。

また、有効だったこととして、大学が提供した自主勉強会、社会福祉学特講と回答した学生が2名ずつ、対策セミナーをあげた学生が1名おり、それぞれを＜自主勉強会＞＜社会福祉学特講＞＜対策セミナー＞とラベリングし、これら3つをまとめて【大学が提供したもの】とカテゴライズしてラベリングした。

＜自主勉強会＞には、「授業とはまた違う勉強の仕方っていうか、実際に自分の言葉で説明したりとか、説明しているのを聞いて、あーこうやって覚えた方が理解しやすいなあって」「基礎的なのもあったし、それで勉強覚えるみたいな。これは自主勉強会でやったなーみたいな。知識がつく」など理解のしやすさについて語られているものを多くカテゴライズしている。また「行けるときは参加する」「ほぼ参加しました」と自主勉強会への出欠に関する語りもここにカテゴライズしている。

また＜対策セミナー＞には、「向こうで作らあった資料がすごい分かりやすくて」「大事なところを教えてくれる」といった有益だったことについての語りと、「（国試対策教員の）先生と言ってること違うかったりする」という語りが含まれた。

＜社会福祉学特講＞には、講義を対面授業とリアルタイム ZOOM の両方で行ったことから、両方の意見が含まれている。社会福祉学特講が有効だったこととして、「（質問が）対面だとすっといける」「先生に質問しにいきやすい」「みんなに会える」「やっぱり対面の方が緊張感もある」「対面の方が気が引き締まりました」「（対面は）気が抜けない。」「自分の中の生活

表 2. 国家試験において有効だったこと

中カテゴリー	小カテゴリー	逐語	
自分で行ったもの	過去問	過去問解いたこと	
	書いて貼る	トイレとか壁に、自分でまとめたやつを目につく場所に貼っておく	書いていってるなとこに貼ることで覚える
	友達と勉強	友達とずっと Zoom 繋いで勉強してた	(友達と)モチベーション保ち合ったり、教え合ったり、私が教えることもあったり、教えてもらうこともあったり
大学が提供したもの	社会福祉学特講	特講	先輩が特講のときに見せてくれた(方法を真似た)
	自主勉強会	自主勉強会です	自主勉強会です
	対策セミナー	(対策セミナーの) 講座を受けに行ったこと	

リズム的には対面で行った方が良かった」など対面授業についての語りが多くカテゴライズされた。リアルタイム ZOOM で授業を行うことについては「通学時間の分、家で勉強できる」「無駄な時間が無くスケジュールが組める」など準備期間が短縮されることを良さとして4名の学生からあげられていた。一方で、「どうしてもだれてしまう」「目が痛いです。ずっと画面見てるから」など、集中のしづらさがデメリットとして4名の学生から語られた。

【自分で行ったもの】と【大学が提供したもの】をまとめて《国家試験において有効だったこと》とカテゴライズしてラベリングした。

2. 有効だったと明言されなかったこと (表 3)

学生コメントに関して、「思い出しながら書いたり(中略)それで覚えたりする」「まとめるうちに覚える」と課題提出をすることで記憶力を高めている語りをまとめて＜覚えられる＞とラベリングし、「自分がほんとに理解しているのか」の確認や、「説明する練習になる」と、理解力の確認をしていたという語りをまとめて＜説明できる＞とラベリングし、「まとめるのに必死」「コピペみたいな感じ」と課題を提出するために行っており、効果がなかったとする語りをまとめて＜効果なし＞とラベリングした。さらに、これら3つをまとめて【学生コメント】とカテゴライズしてラベリングした。

模擬試験に関して、「勉強したらこんなに伸びるんだ!」「勉強した分の点数が出てくる」「自分今こんな立ち位置なんや」と、結果で現在の自身の実力を確認している語りをまとめて＜実力の確認＞とラベリングし、「実際に受けるっていう緊張感」「ペース配分とか

考えてできた」と、試験当日の練習となっていた語りをまとめて＜予行練習＞とラベリングし、さらにこれら2つをまとめて【模擬試験】とカテゴライズしてラベリングした。

国試担当教員がメインで担当したことについて、「先生によってやり方が違うから統一するならいい」「情報が一個のところから入ってくるから吸収しやすい」など教員が1名で担当した方が理解しやすいと感じている語りをまとめて＜統一感＞とラベリングし、「(国試担当教員の)先生のあの授業に完全に慣れてしまった」という語りをまとめて＜慣れ＞とラベリングし、「特に何も・・・」「そんなに嫌とか思ったことない」と一人の教員が担当したことについては何も感じていないという語りをまとめて＜特になし＞とラベリングした。さらに、これら3つをまとめて【一人の教員が担当】とカテゴライズしてラベリングした。

LECの講座に関して、「あんまり見なかった」とあまり活用していない語りが複数あり、これらをまとめて＜見ていない＞とラベリングし、「すごく見にくくて」「オンラインで見続けるのがしんどい」など、オンライン環境への不満をまとめて＜オンラインが合わない＞とラベリングし、さらにこれら2つをまとめて【LEC】とラベリングした。

YouTubeで授業を録画したものを配信していたことに関して、「分かんなかったところを3回くらい見た」「もう一回聞きたいなっていうところだけ聞いてた」など、復習として活用していた語りや、「授業参加出来なかったときは見てました」と、就職活動や資格取得等で授業を欠席した学生が、休んだ授業の内容を把握するために視聴していた語りをまとめて＜授業の補助＞とラベリングし、「結局見方分からん」と視

表 3. 有効だったと明言されなかったこと

中カテゴリー	小カテゴリー	逐語	
学生コメント	覚えられる	なんやったっけ？って思い出しながら書いたり、分かんなかったら動画をもう一回見たりするじゃないですか。それで覚えたりする	まとめるうちに覚えるな
	説明できる	自分がほんとに理解しているのかとか（中略）分かりやすくまとめる練習になった	まとめるっていうか説明する練習になる
	効果なし	まとめるのに必死で授業聞いてへん	結局コピペみたいな感じになっちゃう
模擬試験	実力の確認	1 回目すごい伸びて、勉強したらこんなに伸びるんだ！ってすごい舞い上がっちゃって、そっからはずっと 60、50 とか全然伸びなくて	勉強した分の点数が出てくるから、それを見る事で安心あったり、焦りあったりみたいな
		自分今こんな立ち位置なんやとか確認できたんで、良かった	
	予行練習	実際に受けるっていう緊張感は経験してた方がいかな	ペース配分とか考えて出来たので、模試はやればやるほどいい
一人の教員が担当	統一感	先生によってやり方が違うから、統一するならいいんですけど、違うとね	この先生はこう言ったのにあの先生はこう言ったってなると余計に混乱
		1 人で授業していただいた方が理解しやすいし情報が一個のところから入ってくる方が吸収しやすい	
	慣れ	先生のあの授業に完全に慣れてしまったというか、むしろ他（外部講座）が物足りひん	
	特になし	特に何も・・・	そんなに嫌とか思ったことはない
LEC	見ていない	あんまり見なかった	録画も見なかった
	オンラインが合わない	すごく見にくくて、紙を実際書いている様子をカメラで写してたから	オンラインで見続けるのがしんどい
		カメラに教科書写さはるんですけど、まず見えない	
授業配信 YouTube	授業の補助	先生の言葉がたまに聞き取れないこととかあったんですけど、動画で後で見れるようになってた	分かんなかったところを 3 回くらい見たり
		授業参加出来なかったときは見てました	今日の授業で自分が何分からなかったんかなってほんとになったときは見返したりしてた
		もう一回聞きたいなっていうところだけ聞いてた	何言ってたか分からへんかったときもう一回聞きなおしたり
	見ていない	何回か見ようと思ったんですけど、結局見方分からなくて	勉強関係無く、動画をずっと見続けるっていうのが苦手

聴方法が分からなかったという語りや、「動画をずっと見続けるっていうのが苦手」と動画コンテンツそのものが苦手という語りをまとめて＜見ていない＞とラベリングし、さらにこれら 2 つをまとめて【授業配信 YouTube】とカテゴライズしてラベリングした。

【学生コメント】、【模擬試験】、【一人の教員が担当】、【LEC】、【授業配信 YouTube】は、国家試験の勉強を行う上で有効だったのではと推測される内容も含まれているが、有効だったと明言はされなかったことから、

これらをまとめて《有効だったと明言されなかったこと》とカテゴライズしてラベリングした。

3. 勉強の姿勢（表 4）

4 月～6 月の国家試験対策の勉強を始めたときのこととして、「まあいいやーって感じ」「そもそも勉強するっていうモチベーションに無かった」と勉強に対して消極的な語りがある一方、「やらなあかん、やるかーみたいな」「夜に勉強して、朝に振り返りして」「問題

に慣れようと思ってずっと勉強してました」と既に勉強を始めていた語りもみられ、これらをまとめて＜とりあえず始める段階＞とラベリングした。そして、夏頃のこととして、「めっちゃめっちゃ病んでました」「夏に就活とか卒論とかなんか一気に他のこともしないと」「そこまでスイッチ入って無かった」など勉強に集中できていなかったことが語られ、これらをまとめて＜停滞する段階＞とラベリングした。そして10月～11月の時期に「実際に（先輩が）やってる勉強法を知って、やり始めた」「就活も終わって、もうほんまにここからは国試1本やわ」と本格的に勉強を始めるきっかけの語りや、「毎日勉強」していたという語りが出現し、これらをまとめて＜本格的に試験勉強を行う段階＞とラベリングした。そして、国家試験直前の12月～1月については「ちょっとこう（合格に）近づいたかなって思って、頑張ろう」「後悔したくないからって思ってまたスイッチが入り」と合格に向けラストスパートをかける語りがある一方、「ピリピリって感じやった」「気を抜いたらまずいな」と緊張感を感じていた語りも見られた。また「ちょっとなんか（時間を）持て余してました」と何を勉強すれば良いのか迷っている語りもあった。これらをまとめて＜最後の追い込み段階＞とラベリングした。国家試験に向けた勉強を行う中で、時期による気持ちの変化の4つのカテゴリーをまとめて【変化の段階】とカテゴライズしてラベリングした。

勉強をしている中で「（模試の点数が停滞して）なんか自分何してるんやろとか、今まで何の勉強してたんやろ」と結果が向上しないことに関する語りや「9時から寝るまでの間、11時くらいまではそれ（勉強）をつめつめでやってたので、（ずっと同じ繰り返し）がきつかった」と自分に課したルールを続ける事に対する語りをまとめて＜停滞＞とラベリングし、「他の人が理解してるのに自分だけ理解してない」と周囲と自分の理解力の差を感じる語りや「最初はめっちゃ難しい、過去問を解説するのに必死」と勉強自体が難しいと感じている語りをまとめて＜勉強が分からない＞とラベリングした。また「就活と家庭事情」など勉強以外のことで勉強に集中できない事への辛さについての語りをまとめて＜勉強以外のこと＞とラベリングした。これら勉強をしている中で感じていたことを3つまとめて【国家試験勉強をする中で辛かったこと】と

カテゴライズしてラベリングした。

国試の勉強を続けるモチベーションについて「就職先が決まって、資格手当つくし頑張ろう」と就職後のメリットについての語りや、「親に大学のお金だしてもらって、実習なりいろいろこなして」とこれまで資格取得のために費やしてきた費用や時間に関する語り、「語呂合わせを友達と共有しながら、笑ったりするのがモチベーション」と周囲の仲間との関わりをモチベーションとしていた語りがあり、これらをまとめて＜外的動機付け＞とラベリングした。また「なんか受からへんかったらかつこ悪いから」「落ちたときのことを考える」と不合格だった場合を想像し、モチベーションを維持する語りや、「自分で決めたからにはやり通さないと」「絶対取ってやる、くらいの気持ち」と、自身の気持ちを強く持つことで、モチベーションを維持していたという語りをまとめて＜内的動機付け＞とラベリングした。さらにこれらモチベーション維持に関する2つのカテゴリーをまとめて【モチベーション維持】とカテゴライズして、ラベリングした。

そして【変化の段階】、【国家試験勉強をする中で辛かったこと】、【モチベーション維持】の3つは、勉強をするうえでの気持ちとしてまとめ＜勉強への姿勢＞とカテゴライズして、ラベリングした。

V. 考察

本調査では、国家試験対策において、学生が有効だと感じたことと、受験までの気持ちの変化について明らかとなった。国家試験勉強を行う中で、学生が有効だと感じたものは、【自分で行ったもの】と【大学が提供したもの】に大別され、【大学が提供したもの】のうち、特に学生が有効と感じていたのは＜自主勉強会＞、＜社会福祉学特講＞、＜外部講座＞であった。また、受験までの学生の気持ちの変化の段階は、昨年度の調査（浜内・西川、2021）と同様に4月から＜とりあえず始める段階＞や11月からの＜本格的に試験勉強を行う段階＞など重なるところがありつつも、＜最後の追い込み段階＞が増えたり、【モチベーション維持】の内容がより詳細になったり異なるところもあった。それらについて考察していく。

表 4. 勉強の姿勢

	小カテゴリー	逐語
変化の段階	とりあえず始める段階	雰囲気がまあいいやって感じがあった気がする・・だからそれに乗られてまあいいやって感じ
		4年生の授業特講が始まってからもなんかふわふわして、そもそも勉強するっていうモチベーションに無かったから、とりあえず話聞いて過去問やればいいのかなーっていう感じ
		(4月は) やらなあかん、やるかーみたいな。
		(4月から) 最初は過去問を見て分からんとこ調べて青ペンで書いたりとか夜に勉強して、朝に振り返りして
		実習行くまで(6月まで)の間はずっと問題に慣れようと思ってずっと勉強してました。まだ覚える気とか全然無くて
	停滞する段階	めちゃめちゃ病んでました。また(模試の点数が)落ちたらどうしようとか
		夏に就活とか卒論とかなんか一気に他のこともしないってなったときに国試をするために先他のこと終わらそうってなってしまって、9月10月くらいまでは、ちょっとゆったりというか、あんまりしなかった時もありました
		やらなと思ってたけど、まだいけるやろみたいな。そこまでスイッチ入って無かった。それは7月中旬ですね。(中略)8月は勉強特講以外であんまりしてなかった
	本格的に試験勉強を行う段階	(先輩が来た後から) 実際にやってる勉強法を知って、やり始めたから、そこからスタートかもしれない。
		10月11月くらいに、就活も終わって、もうほんまにここからは国試1本やわってなってからは、徐々にモチベーションとか上がったかな
		10月とかからほんまに毎日勉強してて
	最後の追い込み段階	(対策セミナー後は) 確実な合格点は分かんないけど、ちょっとこう近づいたかなっておもって、頑張ろうって
		12月1月くらいで、あと2ヶ月泣いても笑ってもあとちょっとやわってなってからは、やらな！って思って、後悔したくないからって思ってまたスイッチが入り
		頑張っていましたね。ほんまに1週間前、2週間前はギリギリって感じやった
		(年末くらいに) このまま頑張ったら行けるやろって正直思ってたんですよ。でも気を抜いたらまずいなってなって、もっと頑張ろうってなってました。
		試験直前とかはもう何を覚えてたらいんか分からなくて、ちょっとなんか持て余してました。
国家試験勉強をする中で辛かったこと	停滞	(模試の点数が停滞して) なんかも自分何してるんやろとか、今まで何の勉強してたんやろとか
		9時から寝るまでの間、11時くらいまではそれをつめつめでやってたので、(ずっと同じ繰り返し)がきつかった
	勉強がわからない	過去問を解いても解いても分からないとこでつまづいて、嫌ーってなってました
		名前を覚えることと、他の人が理解してるのに自分だけ理解してない
		最初はめっちゃ難しい、過去問を解説するのに必死
モチベーション維持	勉強以外のこと	就活と家庭事情
	外的動機付け	就職先が決まって、資格手当つくし頑張ろうって
		親に大学のお金だしてもらって、実習なりいろいろこなして、勉強の時期に入って、もう戻れない
		しょうもない語呂合わせを友達と共有しながら、笑ったりするのがモチベーション
	内的動機付け	「国家試験受ける、国家試験受ける、国家試験受ける」ってみんなに言ってる。なんか受からへんかったらかっこ悪いからやろうって
		落ちたときのことを考える
		自分で決めたからにはやり通さないと
		絶対取ってやる、くらいの気持ち

1. 国家試験対策において有効だったこと

国家試験対策において学生が有効だと感じていたことについて、4名の学生が、【自分で行ったもの】をあげた。過去問を解く、壁に単語を貼る、友達と一緒に勉強するなど、方法は4名それぞれ異なっていたが、自分で行っていたことに効果を感じていた。さらに、4名は【大学が提供したもの】をあげた。残り1名も、大学の授業の中で聞いた勉強方法を真似て自身の勉強方法に取り入れていた。また、《有効だったと明言されなかったこと》のうち【模擬試験】【授業配信 YouTube】【一人の教員が担当】は、有効性について明言されなかったものの、《国家試験対策において有効だったこと》と関連して有効に働いていたと考えられる。

① 自主勉強会

【大学が提供したもの】には＜自主勉強会＞、＜社会福祉学特講＞、＜対策セミナー＞がある。効果があった自主勉強会は出席をとってはいないが、毎回13名中5名前後の参加者数であった。そして今回調査に協力した5名全員が行ける限り参加していたことが明らかとなった。自主勉強会は、問題を解き、その解説を実習助手が一方的に行うのではなく、学生と一緒に調べたり、学生同士が教え合う形で行ったりして進めていた。そうした「授業とはまた違う勉強の仕方」が学生にとっては「知識がつく」・「楽しかった」・「覚えやすかった」ようである。また、基礎的な知識の理解を行うことを中心としていたことから、「自主勉強会でやった」と印象に残りやすいという意見が出された。

② 社会福祉学特講

社会福祉学特講は、対面授業とリアルタイム ZOOM の両方で行ったが、対面授業とリアルタイム ZOOM のどちらが良かったかという質問に対して、3名が「どちらでもいい」と答えつつも、「どちらかといえば対面授業が良かった」としたものが2名であり、残りの2名は「対面授業が良かった」と回答している。つまり学生は対面授業を好む傾向にあったといえる。しかし、対面授業とリアルタイム ZOOM とそれぞれの良さをあげていた。許・林（2020）の調査においても、オンライン授業の利点として、通常の対面授業であれば生じる「時間の制約」「距離の制約」「環境の制約」

から自由になれるという3点をあげており、改善点として対面授業よりも集中力が切れる、散漫になるといったことがあげられ、本研究と同様の結果となっている。

また昨年度の調査（浜内・西川,2021）ではオンライン資源のデメリットとして「画面による疲労」があがっていた。2022年度は光華ナビを用いた小テストの実施を中止するなど、画面をずっと見なければいけない授業内容は避けたため、「画面による疲労」にカテゴライズされる意見は少なかった。しかしリアルタイム ZOOM での授業について、「携帯触っちゃう」「やっぱ怠けちゃう」など、自宅というプライベート空間で落ち着いて受けられるからこそ集中がしづらくなっていた。しかし、授業配信 YouTube 動画など、自主的に見るオンライン資源では、「（授業中）たまに聞き取れないこととかあったりしたんですけど、動画で後で見るようになってた」など、＜授業の補助＞として使用されていた。

そして昨年度の調査で対面授業の良さとしてあげられていた「みんなの様子が見れる」「個別対応」「質問のしやすさ」は、今回の調査でも語られていた。また、それに加えて、「対面の方が緊張感もある」「対面の方が気が引き締まりました」と対面授業での緊張感についても良かったこととしてあげられた。

三苦（2022）は「理解と学びやすさにおいては、オンデマンド型遠隔授業が、教室での対面授業より優れている」と結論づけ、他の調査においても様々な学問分野においてオンライン授業が学習に効果があるという結果が出ており、オンライン授業に好意的な学生が多い（秋山ら、2006; 鈴木、2020; 安部、2021）。しかし、これらの研究はいずれもリアルタイムで動画を視聴する方式ではなく、配信した動画を視聴するタイプの授業で行った結果である。つまり、本専攻での取り組みの中で行っている YouTube での配信と似ている。しかし本専攻が行った授業配信 YouTube は、一度リアルタイムで学生が聴講したものであり、他の研究のオンライン授業とは異なる。小田・池田（2009）は授業を録画し、配信したものを学生があまり視聴していなかったことについて、「一度聞いたことのある授業であることから、多用されなかった」と考察しており、本専攻においても同様だと考えられる。また、本研究で対面授業に好意的な意見が多かったのは、録画配信

の授業がなかったことや本専攻が少人数で日頃から同級生や教員との距離が近いと、人に会って話せるメリットが大きくなるのが影響しているのではないだろうかと考える。

③ 外部講座

今回の研究協力者5人のうち＜LEC＞は5名が受講しており、＜対策セミナー＞は4名が受講していた。＜対策セミナー＞の講座では、『見て覚える！社会福祉士国試ナビ 2022』（中央法規出版、2021）や独自で作成した資料を用いながら解説を行うことが効果的だったと感じる要因となった。また開催時期が＜本格的に試験勉強を行う段階＞とちょうど重なる10月～12月に行われたこと、3回の講座の中で試験に出るところにポイントを絞って解説されたことも効果的だったのだろう。同じ外部講座である＜LEC＞と比較すると、＜LEC＞はオンラインで実施され、＜対策セミナー＞は対面で実施された。社会福祉学特講でも、対面授業を望む声が大きかったことから、対面で実施された＜対策セミナー＞の方が好意的な意見が多かったと推察される。

一方、対策セミナーの講師と国試対策教員とで意見が異なる場所があったことで、学生が困惑してしまう場面があったようだ。こうした教員との兼ね合いは、社会福祉学特講を1人の教員がメインで担当したことに対して「情報が1個のところから入ってくる方が吸収しやすい」など＜統一感＞について述べられたことと一致する。複数の講師や教員が担当することで、異なった視点の解説を聞けることは学生にとってメリットでもあり、困惑につながるデメリットでもある。今後、校内外の講師と教員が統一感を持たせることができるようにしていくことや外部講座の導入時期を検討することも重要な課題といえるだろう。

2. 学生の気持ちの変化

学生が4年生になってから受験当日まで、どのような気持ちの変化があったかを尋ねたところ次の4つの段階に分けることができた。4月～6月頃が＜とりあえず始める段階＞、7月～9月頃が＜停滞する段階＞、10月～11月頃が＜本格的に試験勉強を行う段階＞、12月頃～受験までを＜最後の追い込み段階＞である。＜とりあえず始める段階＞では、5名全員が受験勉強

を始めていたものの、ゆっくりと勉強をしている様子が見えなかった。そして、前期が終わり、夏休みに入る7月～9月頃の＜停滞する段階＞では、「落ちたんだろうしよとか、なんとなく不安定」「（勉強を）あんまりしなかった時もありました」と、勉強のペースが落ちていた。この＜停滞する段階＞は、昨年度の調査ではなかった。これは＜とりあえず始める段階＞が、昨年の調査の＜強制力のあるものに頼る段階＞に比べ、「問題に慣れよう」としたり、「過去問を見て分からなくとも調べて青ペンで書いたりとか夜に勉強して、朝に振り返り」をしたりと、自主的に勉強に取り組み始めている学生がいたことが影響しているのではないかと推察する。

また国家試験勉強をする中で辛かったこととして、＜停滞期＞、＜勉強がわからない＞、＜勉強以外のこと＞があげられており、この＜停滞期＞をどのように乗り越えるかが重要であることがうかがえる。この＜停滞する段階＞を乗り越える方法として、武内（2017）は、モチベーション維持への働きかけ、教員が国家試験対策の全体像を見せることなどを提唱している。

本調査で、【モチベーション維持】のために「資格手当」や「親に大学のお金を出してもらって」など＜外的動機付け＞をあげた学生は2名で、「他の人の助けになれる仕事につきたいって思った当時のこと思い出したり」「絶対取ってやる」など＜内的動機付け＞をあげた学生は5名全員であった。成田・宮本（2021）は、学習課題をすることが自分にとって価値があることを認識し、学習課題に積極的に取り組もうとする同一化的調整と内発的動機づけが高い「自律的動機づけ群」が模擬試験の結果が高かったと報告している。合格した5名は、この自律的動機づけ群に近い状態であり、そのこと自体が、モチベーション維持につながり、＜停滞する段階＞を乗り越えることができたのではないだろうか。

その後、就職活動や実習が終わったことをきっかけに＜本格的に試験勉強を行う段階＞に移行した。これは、昨年度の調査でも同様の結果がでている。しかし、昨年度よりも1ヶ月早くこの段階に移行している。これは「先生がよく言っていた」と学生が発言しているように、昨年度の調査結果をもとに、国試担当教員が授業の中で「11月には本格的に試験勉強を始める段階に移行しなければならない」と夏頃から繰り返し伝え

ていたことも影響しているのだろう。

そして、12月頃から＜最後の追い込み段階＞に移行したことも、昨年度には見られなかったことである。昨年度は特講Ⅳを11月～12月にかけて集中講義を行った。しかし、今年度は特講Ⅳを全て1月に設定し、さらに自主勉強として過去問を実施する日を2回設けた。このように、1月が追い込みの時期であることを授業や自主勉強会の設定を通して示したことで、＜最後の追い込みの段階＞が出現したと考える。また、この1月に集中して授業を行ったことで、「こんなに出来てるやん！っていうモチベーション上げる時間」になっていたことや「結構それやってるから大丈夫」と、授業そのものが＜精神的支え＞になっていた。

しかし、全て対面で予定していた授業が COVID-19 の感染拡大に伴い、対面授業とリアルタイム ZOOM とのハイブリッド形式に切り替えざるをえなかった。対面授業とリアルタイム ZOOM のどちらを選択するかは学生に委ねられた。このことが、合否結果にどのような影響を与えたかは、不合格者への調査が不十分であることや、比較対象がないことなどから検証することはできない。しかし、この時期に対面授業による緊張感が減少してしまったことで、全ての学生が＜最後の追い込みの段階＞にまで移行できなかったのではないだろうかと思われる。

そして各段階で模擬試験の結果が気持ちをプラスにもマイナスにも影響を与えていた。しかし「自分今こんな立ち位置なんやとか確認できた」と＜実力の確認＞として役立てていた。また模擬試験を繰り返したことで「実際に受けるっていう緊張感」を味わせるなど、国家試験の＜予行練習＞にもなっていた。

Ⅵ. 課題

本研究は、昨年度の研究を踏まえて対面資源とオンライン資源の両方を戦略的に組み合わせに行った新しい国家試験対策とその支援の効果について調査を行った。しかし、実際には、COVID-19 の感染拡大を十分に予測しきることができず、急遽対面授業とオンライン授業のハイブリッドにするなどの対策をとらなければならなかった。そのため、年度初めに想定していたことを十分に実施できたとは言い難い。また、本専攻では録画配信によるオンライン授業を行っておらず、

オンライン授業の効果を更に高める余地が残されている。小田・池田（2009）の調査では、学習意欲とオンラインへのアクセス回数とが関連していることを示唆しており、録画配信によるオンライン授業の効果は学生の学習意欲と関連していると推察される。今後、学生の学習意欲を見極め、録画配信によるオンライン授業の導入時期や導入方法を検討する必要があるだろう。

また、学生が有効であったと語っていることについて、《大学が提供したもの》と同程度、《自分で行ったこと》があげられていた。これは《自分で行ったこと》が多い学生が合格している可能性も否定することができない。そして、有効な勉強方法に多少の傾向は見られるものの、いずれの方法もデメリットについても語られており、有効な勉強方法の細部は学生によって異なる。このことから、学生が各自で勉強する力を身に付けられるようにする仕組みや、大学がさまざまな勉強方法を学生に提案し、それを学生が活用しながらオリジナルの勉強方法を組み立てられる環境を整えることが課題といえるだろう。オンライン資源を活用することで、勉強方法の選択肢を広げることが可能であるだろう。さらに、外部講座と大学内で行っていることとを連動させることで、異なる情報を学生が聞いて混乱することを防ぐことができると考える。

今回はインタビューの調査対象者が6名と非常に少なかった。特に不合格者は1名しかおらず、本研究では調査対象外となった。そのため、今後も国家試験受験後の学生に調査を行い、合否を分けるものが何かを検討し、国家試験対策とその支援の方法を修正しながらより向上させていくことが必要であると考えられる。

Ⅶ. おわりに

昨年度より、オンライン資源と対面資源を組み合わせた新たな国家試験対策とその支援に取り組み、合格率を向上させてきた。本論では、2021年度に行った国家試験対策とその支援が学生の国家試験に対する姿勢の変化や受験勉強にどのように影響したのかをインタビュー調査した結果、学生が有効だと感じたものは、【自分で行ったもの】と【大学が提供したもの】に大別され、【大学が提供したもの】のうち、特に学生が有効と感じていたのは＜自主勉強会＞、＜社会福祉学

特講>、<対策セミナー>であった。また学生の気持ち【変化の段階】には、<とりあえず始める段階>、<停滞する段階>、<本格的に始める段階>、<最後の追い込み段階>の4つの段階があることが分かった。今後、それぞれの段階に応じて、効果的にオンライン資源と対面資源を組み合わせ、さらに効果的な国家試験対策プログラムを構築していくことが急務である。

引用文献

- 秋山秀典・寺本明美・小藺和剛（2006）「ストーリーミング技術を用いたオンライン授業の教育効果」電気学会論文誌 A（基礎・材料・共通部門誌）、126 巻 8 号、782-788.
- 浜内彩乃・西川ゆかり（2021）「社会福祉士国家試験対策とその支援の実績と課題—2020 年度受験者へのインタビューを通して—」京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要、第 59 号、165-176.
- 成田亜希・宮本友弘（2021）「理学療法士国家試験対策における学習動機づけの調整スタイルの類型化とその特徴」保健医療学雑誌、12（1）、52-61.
- 許挺傑・林満理子（2020）「オンライン授業に対する学生評価アンケートについての一考察—テキストマイニングの手法を用いて—」大分県立芸術文化短期大学研究紀要、第 58 巻、157-178.
- 三苫 博・原田芳巳・山崎由花・内田康太郎・五十嵐涼子・大滝純司（2020）「特集 パンデミック下の医学教育—現在進行形の実践報告— 対面授業は、オンデマンド型授業より優れているのか？」医学教育、51（3）：266～267.
- 小田美也子・池田隆幸（2009）「藤女子大学人間生活学部食物栄養学科における管理栄養士国家試験対策としての e-learning 使用の有用性の検討」藤女子大学紀要、第 46 号、第 II 部：11-17.
- 鈴木大助（2020）「新入生を対象としたプログラミング入門科目におけるオンライン授業と教室授業の実践比較」情報処理学会研究報告、CE-156 No.6、1-6.
- 安部由美子（2021）「Teams と Moodle を活用したオンライン授業改善」LET 関西支部研究集録、Vol.19、83-96.

参考文献

- 医療情報科学研究所編集（2021）「社会福祉士国家試験のためのレビューブック 2022」メディックメディア；第 10 版
- いとう総研資格取得支援センター編集（2021）「見て覚える！社会福祉士国試ナビ 2022」中央法規出版

謝 辞

本稿は、これまで国家試験対策とその支援に携わっていただいた京都光華女子大学の非常勤の先生方も含めたすべての教職員の力なくしては、完成することができませんでした。特に石井祐理子先生、南多恵子先生、千葉晃央先生、村上貴栄先生には本稿を作成するにあたりご助言をいただきました。そしてコロナ禍での就職という大変な中、時間を作り、協力してくれた卒業生に感謝いたします。皆さま、誠にありがとうございました。最後になりましたが、コロナ禍という不測の事態においても、最後まで努力しつづけ、合格を目指した学生みなさんに敬意を表します。

